

# PREVENTION No.337

2021年12月16日開催

## アルコール依存症の転帰調査から見てきたこと 吉村 淳(東北医科薬科大学 精神科学教室)

従前より、アルコール依存症の退院後の治療において、通院、自助グループ参加、治療薬（抗酒薬）の服用が3本柱として経験的に推奨されている。ただし、実際に退院後にどの程度の人が通院したり、自助グループに参加できているのか、そのような人達にどのような特徴があるのかといった問題について、国内外の文献を見渡しても、研究が乏しく、明確な結果が出ていない。

今回、国立病院機構久里浜医療センターでのアルコール問題で入院治療を受けた637名を対象に、退院後の治療アドヒアランスと飲酒の転帰について確認した。対象者の50.8%が定期的に通院しており、通院しなかった対象者は14.6%であった。通院なし群では渴望度が有意に高かった。それにもかかわらず、退院時に治療薬が処方されていないケースが多く、退院時に積極的に治療薬を処方するなど、通院を促す働きかけを考慮する必要性が認められた。

自助グループについては対象者の29.4%が一度は参加しており、70.6%は一度も参加がなかった。自助グループへの参加中断群で渴望度が有意に高く、強制退院となった者の比率が意外に高かった。治療（入院・通院）からdropoutした場合に、自助グループが受け皿になっている可能性が示唆された。しかし、治療にdropoutした者は自助グループにおいてもdropoutしやすい傾向が認められた。断酒という目標に縛られずにより寛容な姿勢で支援を継続することが望まれる。